



報告

周作クラブ会報

(第94号)

2024年2月29日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

新年会報告	1	2
原稿発掘	3	面
遠藤周作文学館便り	4	面
周作クラブ長崎便り	5	面
連載①&原点の旅	6	面
町田文学館からの報告	7	面
お知らせ欄	8	面

2024年新年会

久々に笑顔で集い賑やかに

1月27日(土)、周作クラブ新年会が、東銀座松竹スクエア内「SCHMAZ(シュマッツ)」で開催された。コロナ禍での初のオンラインによる開催などを余儀なくされていた期間を経て、4年ぶりに待望の対面での会である。前日まで日本列島に寒波が到来して交通事情も心配されたが、快晴の空のもと、北海道、東北や近畿地方など遠方からの会員、多くの新入会員も含め約70人が集い賑やかな会となった。

今年は元旦から能登半島地震という災害があり、周作クラブとしても発足当初から幹事を務めていた高橋千劍破さんの訃報という悲しい知らせがあったが、こうして集える事に感謝しながらの開会である。まず、闘病中にもかかわらず、前号まで会報編集長を務めた高橋幹事に黙祷を捧げ、加藤宗哉会長代行の開会宣言で会はスタートした。

最初に遠藤周作ご長男・遠藤龍之介さん(フジテレビ副会長・民放連会長)から挨拶があった。「毎年、年末に清水寺でその年の世相を表す漢字が選ばれる。昨年は「税(ぜい)」であったが、個人的には濁点を取った「正(せい)」だと思ふ。年末年始にあった色々な問題に、我こそは正しいと声高に意見を述べる人々の様子を見ていて息苦しさを感じて

いたところ、40年前に産経新聞の正論に書かれた『正しい事を述べようとするときは鈍感さ、残酷さを併せ持つ。正しいと思うことをするときには細心の注意をすべきである』という父・遠藤周作の文章に接し得心した。父の人生の約9割の年月を生きたが、後もう少しがんばって生きて行こうと思っている今年もよろしく願います」

続いてグラスを持って進みでた池坊保子さんは、「元旦から痛ましい出来事があり、今も苦しんでいる方がいらっしやる事を思うと胸が苦しくなる。遠藤先生の作品の大きなテーマは寄り添うという事だと思ふ。まず相手の心に寄り添い、気持ちを考えて上で困難な日々を送っている方々を支援することが大切なのではないか」と語った。「遠藤先生を中心に



遠藤龍之介さん

こんなに素敵なお仲間とご縁を戴いたのだから、先生の意をくみ、心豊かに健康で過ごしましょう。乾杯」という発声に皆一斉にグラスをあげた。

様々な種類のビールとソーセージ、シチューといったドイツ料理を楽しみながら、久しぶりの対面での集まりに、あちこちのテーブルから笑い声があがり、また席を移動して近況を伝え合い、「遠藤周作」という共通の話題を中心に会は賑やかに盛り上がりつつゆく。

昨年は生誕100年の年という記念の年で、長崎市遠藤周作文学館をはじめ、町田市民文学館ことばらんど、軽井沢高原文庫等でも記念の企画展が開催され、また、次々と新刊本も出版された。そして3年前発見、公表された戯曲『善人たち』が、夏に劇団民藝で上演された。その劇団民藝の白川浩司代表は会の中ほど



劇団民藝 白川浩司代表



乾杯の発声 池坊保子さん

のスピーチで、「善人たち」上演に当たり劇団の過去の資料を調べていたら、昔は演劇の人も文学の人も一緒に様々な事をやっていたことがわかった。自分達は演劇畑の人間なのでその仲間でかたまってしまいがちであったが、別々でなく文学をはじめ他の分野の方々と交流出来たら一緒に楽しい事が出来るのではないかと考えるようになった」と語り、「ここにいらっしやる方は文学をなさる方も多いでしょう。戯曲を書かれたらぜひ、私たち「民藝」へ持ち込んでみて下さい」と笑いを誘った。

そしていよいよ新年会恒例の福引き抽選会へ。今回の特賞は「遠藤周作講演選集」の6枚組CD(第6巻はご母堂・遠藤郁さんのカトリック聖歌集)、1等は長崎市遠藤周作文学館の生誕100年記念展公式ガイドブック「遠藤周作のすべて」と世界の各分野の著名人から寄せられたメッセージを集めた記念文集「遠藤周作」(次頁に続く)